



Title	母語を共有しない非母語話者同士のオンライン交流における学習者の不安：中国人日本語学習者を対象としたインタビューの分析による考察
Author(s)	鬼塚, 宏志; Onizuka, Hiroshi
Citation	高等教育ジャーナル：高等教育と生涯学習, 33, 1-11
Issue Date	2026-04
DOI	https://doi.org/10.14943/J.HighEdu.33.1
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99281
Type	departmental bulletin paper
File Information	HighEdu_32_p1-11.pdf



Learners' Anxiety in Online Interactions with Non-native Speakers Who Do Not Share Their Native Language: Considerations Based on Analysis of Interviews with Chinese Learners of Japanese

Hiroshi Onizuka*

Graduate School of International Media, Communication, and Tourism Studies, Hokkaido University

母語を共有しない非母語話者同士の オンライン交流における学習者の不安 —中国人日本語学習者を対象としたインタビューの分析による考察—

鬼塚 宏志**

北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院

Abstract — This document aims to provide a comprehensive explanation of the anxiety experienced by learners when interacting online with non-native speakers who do not share a native language. To this end, data collected through online interactions with different interlocutors and interviews were qualitatively analyzed. The phenomenon of “output anxiety” in contact situations is common, irrespective of the interlocutor. Conversely, “input anxiety” appears to depend on the interlocutor. Interactions with native speakers intensified in response to the speed of speech and complexity of the vocabulary used. Interactions with non-native speakers intensify due to language use that deviated from learners' own norms. The data also show that in interactions among non-native speakers, the shared experience of learning a language can alleviate anxiety and foster relaxed communication. The most relaxed interactions occur between non-native speakers who share the same native language. However, these interactions may lack the necessary tension, which is often considered conducive to effective learning. When planning and implementing online communication activities, it is important to strike the right balance between alleviating anxiety and ensuring that a certain degree of tension is maintained by creating an environment suited to the learner's level.

(Accepted on 30 January 2026)

*) Correspondence: Graduate School of International Media, Communication, and Tourism Studies, Hokkaido University, Kita 17, Nishi 8, Kita-ku, Sapporo, Hokkaido, 060-0817 Japan

E-mail: onizuka.hiroshi.g9@elms.hokudai.ac.jp

**) 連絡先：060-0817 札幌市北区北 17 条西 8 丁目 北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院

1. 外国語教育における国外とのオンライン活動

近年、教育のデジタル化が進み、国外とのオンライン活動が授業に活用されている。従来、外国語教育では、留学により目標言語が使用されるコンテキストに身をおくことが高い学習効果を持つとされたが、全ての学習者が留学できるわけではなく、実際に言語を使用する機会のないまま外国語を学ぶ学習者も多い。本稿で取り上げる中国の高等教育機関もそのような状況にある。中国語母語の教師が中国語母語の学生に日本語を教える環境では、知識の積み上げが中心となりがちで、貴重な言語使用機会である日本語母語話者教師との交流も、人材の不足が指摘されている(趙, 2021)。学生の言語使用を促すため、教室内の学習者同士のインターアクションによるコミュニケーションな活動が導入されているが、母語を共有する者同士が目標言語を使ってコミュニケーションを行うことに必然性はなく、教師の管理による人工的な状況設定から抜け切れていない。デジタル技術を活用した国外とのオンライン活動で「実際使用(中井, 2012)」の場を教室活動に取り入れることは、留学の代わりとまでは言えずとも、大きな負担なく学習者に言語使用の場を提供し、参加者の管理による本番性の高いインターアクションを促進できる点で、注目に値する。

当研究では中国の大学で日本語を専攻する学生と、中国以外の国の日本語学習者が、母語を共有しない非母語話者(以下、NNS)同士という、対等な立場で日本語を使用する場面をオンラインで創出し、彼らの意識や行動について、インタビューの分析を通し、深い解釈を試みる。

2. 外国語教育におけるコミュニケーションと不安

外国語教育では、学習者と母語話者(以下、NS)とのインターアクション活動が推進されている。学習者はNSとの交流で多くの言語学習のメリットを得るが、NS側は母語を用いた国際交流への参加を希望する人に限られ、学習者の言語学習に「付き合っ

てあげる(目黒, 2007)」というボランティア的要素が含まれることもあり、目的や利益の不一致から参加者を集めるのが困難な場合も多い。また、外国語学習のモデルがNSに据えられることが多いが、実際のNSとのコミュニケーションでは、学習者の不安が強まる傾向があり、それがコミュニケーション、延いては学習の障壁となる場合もある。

外国語学習における不安(anxiety)は、1980年代以降、学習の情意要因の一つとして注目されてきた。Krashen(1981)の情意フィルター仮説では、目標言語の新たな入力を受けた際、不安等の心理的障壁(情意フィルター)があると習得は制限されると仮定された。Horwitz, *et al.*(1986)は、外国語学習者の不安はコミュニケーション・評価・試験の不安に関連するとし、自己認識・信念・感情・行動の複合体として学習者の不安を測るための尺度FLCAS(Foreign Language Classroom Anxiety Scale)が開発され、現在も広く用いられている。近年では、Russell(2020)がオンラインで外国語を学ぶ学習者の不安をFLCASを用いて調査し、不安の軽減を促す教育的介入の提案を行っている。

しかし不安がなければ、それ即ち理想的な学習環境だとは言いきれず、Scovel(1978)は、不安の軽減が必ずしも学習効果に結びつくわけでないことを指摘している。Kleinmann(1977)は外国語学習の不安を、学習を促進させる不安と、学習の低下を引き起こす不安とに分類し、前者が外国語クラスでの好成績と結びつく例を報告した。Spielmann & Radnofsky(2001)はanxietyとは異なる、有益・有害・またはそのどちらとも認知されない作用を持つtensionの概念に注目し、コミュニケーション能力の熟達には、anxietyの軽減だけでなく、有益なtensionとのバランスを追求する必要があると述べた。倉八(2021)は、学習者のコミュニケーション能力育成には、不安の少ない環境の創出と同時に、意味のやり取りを促進し、教室活動に本物性を取り込むことにより、学習者に学びの緊張感をもたらすことが重要であると述べている。この「学びの緊張感」は、上記の「学習を促進させる不安」や「有益なtension」と同様、情意的不安を伴いながらも、学びに有益であると認知される緊張状態として理解することができる。

接触場面の先行研究では、対話者によって異なる

学習者の不安の傾向が明らかにされている。赤羽 (2014) は、NS との接触場面で、学習者は、対話者と使用言語の背景が共有されないため、不安と緊張が高まり、NNS 同士の接触場面では、使用言語を目標言語として共有するため、不安と緊張が緩和する傾向があるとした。ファン (2011) は、NNS 同士の接触場面では、NS との接触場面と比較して、言語能力差が少なく言語規範が緩いため、ある程度緊張から解放され、よりリラックスして会話に参加する傾向があることを示した。これらの研究では NS とのコミュニケーションとの比較による一般的傾向の把握を通し、不安の軽減や緊張の緩和が見られる NNS 同士の交流活動の学習効果が示唆されるが、学習者の不安とその影響をより深く詳細に把握するためには、学びに必要な緊張感とのバランスにも注目し、考察を加える必要があるだろう。

3. 研究目的とリサーチクエスチョン

当研究では、国外とのオンライン交流活動の計画・実施に当たり十分に考慮する必要がある、コミュニケーションの際の参加者の不安の全貌を明らかにすることを目的とし、母語を共有しない NNS 同士で平等な力関係を前提として設定した状況下でのオンラインコミュニケーションを探究する。NS 対 NNS、母語を共有する NNS 同士の事例を同時に検証し、比較することにより、母語を共有しない NNS 同士のオンラインコミュニケーションの複眼的な解釈を試みる。その際、学習者の不安の程度のみに着目するのではなく、NNS 同士のコミュニケーションの特徴とされる緊張の緩和や、不安が言語学習に与えるポジティブな影響としての学びの緊張感にも注目する。緊張の緩和は、不安や緊張の度合いが低く、より解放的・積極的な言語行動に繋がる状態のこと (赤羽, 2014)、学びの緊張感とは、前述の通り、例え情意的な不安があっても、認知的には学びに有益であると捉えられる緊張状態のことを指す。リサーチクエスチョンは次の 3 つで、1) と 2) に答えることで、3) の示唆を得ることを目指す。

1) 母語を共有しない NNS 同士のオンライン交流

における学習者の不安にはどのような特徴があるか。

- 2) 母語を共有しない NNS 同士のオンライン交流における、緊張の緩和と、学びの緊張感について、学習者はどのように認識し、関連付けるか。
- 3) 母語を共有しない NNS 同士のオンライン交流はどのような点を考慮して計画・実施されるべきか。

4. 研究手法と調査

学習者個人の特徴とその背景を明らかにし、理論を構築するため、3 種類のオンライン交流の実施と、調査対象者へのインタビューにより収集したテキストデータを質的に分析・考察する。なお、調査・データ収集に当たっては、事前に筆者の所属機関で研究倫理申請を行い、許可を得た。

4.1 質的研究

質的研究は、社会学や人類学において他者への関心を出発点に発展し、教育・医療・看護等の研究分野で広く用いられている (Denzin & Lincoln, 2000)。観察やインタビューの記録をもとに分析・理論化すること、研究者の主観・主体的解釈を積極的に活用することが特徴であり (大谷, 2019)、現実を反映した理論を構築する際の最適な方法とされる (Richards & Morse, 2007)。学習者の個々の語りから、接触場面における彼らの不安の解明を目指す当研究の目的から、質的研究手法を採用するのが適当であると考えた。

4.2 調査対象者

調査対象者は、中国の異なる 2 つの大学で日本語を専攻する、日本語学習歴 3~4 年、日本滞在経験及び留学経験のない大学生 8 名である。詳細は表 1 に示す通りで、学年・年齢・学習歴は調査当時のものである。調査対象者及び交流の対話者へは、個人情報取り扱い、データの管理・使用用途等について書面と口頭で説明し、同意書に署名を得た。

表1 調査対象者

名称	大学所在地	学年	性別	年齢	日本語 学習歴
CS1	中国四川省	大学2年	男性	10代	約3年
CS2	中国四川省	大学2年	男性	20代	約3年
CS3	中国四川省	大学2年	男性	20代	約4年
CH1	中国湖南省	大学3年	女性	20代	約3年
CH2	中国湖南省	大学3年	女性	20代	約3年
CH3	中国湖南省	大学3年	女性	20代	約3年
CH4	中国湖南省	大学4年	女性	20代	約4年
CH5	中国湖南省	大学4年	男性	20代	約4年

4.3 3種類のオンライン交流活動

母語を共有する日本語 NNS 同士の日本語交流(以下, 交流①), 母語を共有しない日本語 NNS 同士の日本語交流(以下, 交流②), 日本語 NS 対日本語 NNS の日本語交流(以下, 交流③)の場を設定し, 調査対象者に参加してもらった。交流②の対話者として, 日本語学習者8名の協力を得た。彼らはスペイン語(2名), タイ語(1名), アルメニア語(2名), 韓国語(2名), デンマーク語(1名)母語の, 長期日本滞在・留学経験のない学習者である。交流③の対話者として, 日本の大学生・大学院生5名の協力を得た。いずれの対話者も, 調査対象者と面識のない同世代の男女である。交流①は調査対象者同士で, 交流②と③は調査対象者と対話者で, ランダムに初対面のペアを組み, Zoom や WeChat のビデオ通話機能を用いてオンラインで交流した。本人の希望やスケジュールの都合により一部の交流のみに参加した調査対象者もいる。交流①は2024年11~12月, 交流②は2024年7~8月と2024年12月, 交流③は2025年2~3月に実施した。交流時間は60~90分で, 自己紹介と自由会話の後, タスクとして, 海外の大学日本語学科で一般的に実施されるコミュニケーション的な活動であるロールプレイとディスカッションを行ってもらった。毎回複数の異なるテーマを用意し, 参加者が相談してテーマを選択できるようにした。筆者は指示役としてビデオ通話に参加したが, 各タスクの最中はマイクとビデオをオフにした。

4.4 インタビュー

調査対象者が日本語学習者であることを考慮し, 当研究では書面(中国語)と口頭(日本語)で2段階のインタビューを行った。まず, 交流②終了後と交流③終了後に, 調査対象者へ書面でのインタビューを実施し(以下, それぞれ書面インタビュー①, 書面インタビュー②), 「交流の感想」「交流の比較(書面インタビュー①では主に交流①と②の比較, 書面インタビュー②では主に交流②と③の比較)」「日本語コミュニケーションをどのように学んでいるか」等の質問に自由記述式で回答してもらった。質問と回答は全て中国語で, 回答を日本語に翻訳した後, 中国語母語の日本語上級者によるチェックを受けた。その後, 調査対象者へ口頭でのグループインタビューを2回実施し(以下, それぞれ口頭インタビュー①, 口頭インタビュー②), 筆者がインタビュアーとして, 「書面インタビューの回答で筆者が気になった点」「交流について筆者が気になった点」「日本語コミュニケーションについての調査対象者の意識」等について尋ねた。口頭インタビュー①は, 2025年1月に調査対象者6名を3名ずつ2つのグループに分け, 各グループ約60分, 口頭インタビュー②は, 2025年4月に調査対象者5名を2名と3名の2つのグループに分け, 各グループ約90分, 半構造化形式で行った¹。口頭インタビューは日本語で実施し, 日本企業で翻訳・通訳業務を行う中国語母語の協力者に同席してもらい, インタビュー中, 日本語に関して問題が生じた際, 調査対象者が母語で質問・援助の要請ができるようにした。録音したインタビューデータを文字起こしした後, 明らかな誤用を修正, 言い淀み等を削除し, 調査対象者と協力者の中国語でのやり取りは, 協力者とは異なる中国語母語の日本語上級者に録音を聞いてもらい, 通訳のズレや漏れがないことを確認した。結果, 書面インタビュー①②, 口頭インタビュー①②を合わせて, 約67,000字のテキストデータを収集した。

4.5 テキストの内容分析

データを基本要素に分解し, 解釈可能な形で表現・構成するため(サンデロウスキー, 2013), テキ

ストデータ全体に対し、質的分析ソフト NVivo15 を用いたテキストの内容分析を行った。内容のまとまり毎にデータを切片化し、共通するテーマ・カテゴリーへ振り分けるコーディングと、ネーミングの作業を行った。データを複数回読み返し、コーディングとネーミングの検討と修正を繰り返した。

4.6 SCAT による分析

テキストの内容分析により、『不安』『緊張の緩和』『学びの緊張感』²のテーマ・カテゴリーにコーディングされたデータの中で、特に対話者の違いによって異なる、学習者の不安に関する意識が表れていると思われる箇所を、注目すべきやり取りとして抜粋した。該当する箇所を質的分析手法 SCAT (大谷, 2019) を用いて詳細に分析・考察する。SCAT は、切片化したデータをマトリックス表に記入し、各切片に対し「データの中の注目すべき語句」「それを言いかえるためのテキスト外の語句」「それを説明するようなテキスト外の概念」「そこから浮かび上がるテーマ・構成概念」を順に記述していく質的分析手法であり、4 段階のコーディングを経て脱文脈化したコードを、ストーリーラインにおいて再文脈化し、得られた知見をもとに、一般性・統一性を持った形で理論記述の生成を行う。SCAT では一般化を計りながらも、個別の対象者の語りの文脈や背景を保持したまま分析することができ、調査対象者の語りから分かることを具体的かつ広範に捉えることを志向する当研究の目的に一致すると考えた。また、主観的・主体的解釈を積極的に用いることが推奨される質的研究は、時に極めて恣意的な結論が導き出される危険性があるが、SCAT では分析の過程が明示的で、それが分析の妥当性確認のためのセルフリフレクションの道具としてだけでなく、他者との確認にも活用できる。当研究の分析は、その過程を示すマトリックス表とともに他の研究者に共有し解釈に極端な差がないことを確認した。本稿では、表 2 に一例として SCAT の分析マトリックス表の全体を掲載し、以降は、表 3 に生成したストーリーラインと理論記述のみを記載する。

5. 分析・考察

先行研究では、NNS 同士の接触場面では、NS との接触場面と比べ、学習者の不安が減少する傾向が示されるが、今回、交流の実践を経て行ったインタビューでは、対話者が母語を共有しない NNS の場合も、多くの調査対象者が様々な不安を感じていたことが分かった。『不安』のテーマにコーディングされた発言のうち、母語を共有しない NNS との交流の文脈で語られた切片は 12 個、NS との交流の文脈で語られたものは 23 個、NNS か NS かを特定せず、中国語母語でない外国人との交流の文脈で語られたものは 8 個であった。なお、母語を共有する NNS 同士の交流の文脈で語られたものはなかった。データ内の不安に関する発言を、自身の発言に起因する不安と、対話者の発言に起因する不安の 2 つのカテゴリーに分類し、前者を『アウトプットの不安』、後者を『インプットの不安』とネーミングし、考察した。

5.1 『アウトプットの不安』と『インプットの不安』

『アウトプットの不安』は、自らの発言が、意図通りに対話者に理解されないことが、不成功なコミュニケーションに繋がること、また、それにより対話者に迷惑をかけたり傷つけたりすることへの不安、『インプットの不安』は、対話者の発言を、対話者の意図通りに理解することができないことが、不成功なコミュニケーションに繋がるのではないかという不安を指す。『アウトプットの不安』のカテゴリーにコーディングされた発言のうち、母語を共有しない NNS との交流の文脈で語られた切片は 8 個、NS との交流の文脈で語られたものは 11 個、NNS か NS かを特定せず、中国語母語でない外国人との交流の文脈で語られたものは 8 個であった。一方、『インプットの不安』にコーディングされた発言のうち、母語を共有しない NNS との交流の文脈で語られたものは 4 個、NS との交流の文脈で語られたものは 12 個、中国語母語でない外国人との交流の文脈で語られたものはなかった。いずれも、母語を共有する NNS 同士の交流に関するものはなかった。『アウトプットの不安』は、対話者が母語を共有しない NNS

表2 引用1を含むインタビューのやり取りの SCAT 分析マトリックス表

	テキスト	テキスト中の 注目すべき語句	テキスト中の 語句の言い換え	左を説明するような テキスト外概念	テーマ・ 構成概念
筆者	(交流②の対話者)と話した時、学習者が共通して持っている感覚や経験が、日本語のコミュニケーションの助けになったと感じますか。	学習者が共通して持っている/感覚や経験/コミュニケーションの助けになった	学習者同士の共通する感覚/コミュニケーションでの有効性	学習者の共通認識/エンパシー/コミュニケーション補助	学習者同士のエンパシー/コミュニケーションにおける補助機能
CS1	うーん、(交流②の対話者)と話す時、実は、彼が言ったことが、たまに聞き取れなくて、ちょっと、何を話したらいいのか分からないこともある。	彼が言ったこと/たまに聞き取れなくて/何を話したらいいのか/分からない	外国の学習者/聞き取りにくい発言/反応/戸惑い	第三国の学習者の日本語の非正確性/反応に対する戸惑い	母語を共有しない日本語NNS/規範から逸脱した日本語使用/不安
CS1	そして、(交流②の対話者)と話す時、どうやって、彼に話を理解させればいいのか。それは、ちょっと難しいと思います。	どうやって、彼に理解させればいいのか/ちょっと難しい	理解を促す話し方/難しさ	相手の理解を促す伝達の工夫/困難	相互理解を達成するための工夫/困難
筆者	それは、(交流③の対話者)とは、どうでしたか。	どうでしたか	日本人の場合	日本語母語話者の場合	日本語 NS の場合
CS1	(交流③の対話者)と話し合う時と比べると、最初の方が日本の方より話しにくいと思います。	最初の方が/日本の方より/話しにくい	外国の学習者/困難/日本人/話しやすさ	第三国の学習者とのコミュニケーションの困難	母語を共有しない日本語NNS との日本語交流/困難
CS1	相手が外国人だとしたら、その相手は日本語学習者ですから、日本語の使い方にミスがあるかもしれない。そして、その時、私は正しく理解しにくい。私にとってはその問題がある。	相手は日本語学習者/日本語の使い方/ミスがある/正しく理解しにくい/問題	外国の学習者/間違った日本語/相手の意図を汲み取る困難/コミュニケーションにおける障害	学習者の日本語の非正確性/規範からの逸脱/コミュニケーションエラー	学習者の日本語/規範からの逸脱/コミュニケーションにおける障害
筆者	さっき CS2 さんは、日本人の方が言うことが難しいから、理解しにくい、そして、緊張したり、不安になったりするって言ってたけど、CS1 さんはそれとは反対かな。	日本人/言うことが難しい/緊張したり/不安になったりする/反対	日本人/難解語彙の使用/緊張や不安/真逆の意見	日本語母語話者の豊富な語彙バリエーション/コミュニケーション不安/意見の相違	日本語 NS の語彙バリエーションの豊富さ/不安/意見の相違
CS1	うん。そうですね。相手は日本人ですから、相手がそう言ったら、きっと彼の道理がある。意味がある。もし、その時理解できなくても、ちょっと考えたら大体の意味が分かる。	相手は日本人/そう言ったら、きっと彼の道理がある/考えたら大体の意味が分かる	日本人/発言意図が明確/熟考による理解	日本語母語話者の規範に則った発話/スムーズな理解	NS 規範/円滑な理解
筆者	うんうん。外国人の時はその道理もないかもしれない？	外国人/道理もないかもしれない	学習者/発言意図が不明確/熟考にも関わらず理解不達成	学習者の規範から逸脱した発話/理解不能	規範からの逸脱/理解不能
CS1	はい、そうですね。	そうですね	同意		
〈ストーリーライン〉 聞き手が「学習者同士のエンパシー」が「コミュニケーションにおける補助機能」として作用するかどうかを尋ねたところ、CS1 はむしろ、「母語を共有しない日本語 NNS」の「規範から逸脱した日本語使用」は「不安」や「困難」を引き起こすと述べた。[相互理解を達成するための工夫]が必要であり、[日本語 NS の場合]と比較すると、「母語を共有しない日本語 NNS との日本語交流」では「困難」を感じる場面が多いと語った。別の対象者は「日本語 NS の語彙バリエーションの豊富さ」が「不安」に結びつくと言ったが、それとは「意見の相違」が見られ、CS1 は日本語 NS は「NS 規範」に則っているため、「円滑な理解」に繋がるが、「学習者の日本語」は「規範からの逸脱」が見られ、それが「コミュニケーションにおける障害」となり、「理解不能」な状況を誘発するものと認識している。 〈理論記述〉 「母語を共有しない日本語 NNS」とのコミュニケーションは、「日本語 NS の場合」と比較して、「相互理解を達成するための工夫」が必要であり、「困難」である。/[母語を共有しない日本語 NNS]の「規範から逸脱した日本語使用」は、「不安」を呼び起こす。/[学習者の日本語]の「規範からの逸脱」は「コミュニケーションにおける障害」となり、「理解不能」な状況を誘発する。/日本語 NS は「NS 規範」に則っているため、「円滑な理解」に繋がる。					

の時と、NS の時とで、特に違いが見られなかったが、『インプットの不安』は、対話者の違いにより性質の違いが確認できた。

次の引用 1 は対話者が母語を共有しない NNS の時、引用 2 と 3 は対話者が NS の時の『インプットの不安』について言及したものである。各引用箇所を含むインタビューのやり取りを SCAT の手法で分析した。引用 1 を含むやり取りの SCAT マトリックス表を表 2 に、引用 2 と 3 を含むやり取りに対して生成したストーリーラインと理論記述を表 3 に示す。

引用 1—CS1, 口頭インタビュー②

(交流②で対話者が学習者であることがコミュニケーションの助けになったかどうかについて)(交

流②の対話者)と話す時、実は、彼が言ったことがたまに聞き取れなくて、ちょっと何を話したらいいのか分からないこともある。(略) 相手が外国人だとしたら、その相手は日本語学習者ですから、日本語の使い方にミスがあるかもしれない。そして、その時、私は正しく理解しにくいです。

引用 2—CS2, 口頭インタビュー②

(交流③で会話の進行を対話者に頼る場面が見られたことについて) やっぱ日本人に対して日本語でコミュニケーションする際に、レベルが高くて、交流しづらいですね。相手がペラペラ、自分が分からない日本語ばかり言ったら、それはちょっと答えづらいですね。外国人だとお互いに日本語学習者じゃないですか。分かる単語もみんな

な限られている。

引用 3—CS3, 書面インタビュー②

(最も緊張した交流について) 日本人とのコミュニケーションは緊張することが多いですが、それは主に、彼らの日本語は非常に流暢で速く、敬語を使うことが多いため、理解できなかったりついていけなかったりすることが多いからです。

NS との交流で、学習者は、日本語を母語として自由に使いこなす対話者と、日本語が目標言語であり使用に制限が伴う自身との間に、大きな能力的なギャップを認識しており、NS の発話スピード、語彙の豊富さ・難解さ、複雑な敬語の使用等により、相手の意図通りに理解し、適切に反応することができないのではないか、会話から置き去りにされてしまうのではないかという不安を抱えている。一方で、対話者が自身と同様に学習者である、母語を共有しない NNS との交流では、自身が正しい日本語として認識する規範から、対話者の日本語が逸脱することによって、相手の意図を理解できない状況が生じることに不安を抱えていることが分かった。

5.2 母語を共有しない NNS 同士の交流における『緊張の緩和』

『緊張の緩和』は、インタビュー中、主に「リラックス」という言葉を用いて語られた。このカテゴリーにコーディングされた発言は、母語を共有しない NNS との交流の文脈で語られたものが 6 個、NS との交流の文脈で語られたものはなかった。引用 4 と 5 は、母語を共有しない NNS との交流での『緊張の緩和』に関する発言である。引用箇所を含むインタビューのやり取りを SCAT の手法で分析し、表 3 に示す通りストーリーラインと理論記述を生成した。

引用 4—CH4, 書面インタビュー②

(交流①～③を比較し、最もコミュニケーションしやすいと感じたものについて) 日本語でコミュニケーションをとる場合、日本語を学んでいる外

国人とコミュニケーションをとるのが一番良いと思います。両者とも日本語を母語としていないため、(略) お互いの文法上の間違いや発音の問題に対して寛容であり、コミュニケーションの雰囲気は非常にリラックスしています。両者とも、コミュニケーションの形式よりも内容に重点を置くようになるため、言語エラーによるストレスが軽減されます。日本語を学ぶ外国人は通常、日本文化についてある程度理解していますが、日本人ほど文化的な細部に敏感ではないため、コミュニケーションは文化的規範よりも、情報の伝達に重点が置かれます。

引用 5—CH5, 書面インタビュー②

(交流②と③におけるストレスの違いについて) 日本語を母語としない人とコミュニケーションをとる場合、使用する言葉が比較的簡単で、細かい間違いをあまり心配する必要がないため、よりリラックスして会話ができるかもしれません。

使用言語を目標言語として共有する、母語を共有しない NNS との交流で、学習者同士は日本語を学ぶ共通のプロセスを経ているため、理解しやすいこと・しにくいことの感覚をある程度共有しており、日本語の言語的規範、日本の文化的規範からの逸脱に寛容であることから、緊張が緩和し、リラックスした雰囲気、発話内容に意識を向けたコミュニケーションが達成される傾向があることが分かる。

5.3 母語を共有する NNS 同士の交流における『学びの緊張感』の不足

書面インタビュー②の「母語を共有する NNS・母語を共有しない NNS・NS のうち、最も日本語でコミュニケーションしやすいと感じるのはどれか」という質問に対し、インタビュー参加者 5 名のうち 4 名が「母語を共有する NNS」と回答した。その理由として、問題が生じた際は中国語を話せば良いという『中国語の使用』、中国人の考え方で日本語を話すためお互いに理解しやすいという『前提の共有』の、主に 2 つの要因が挙げられた。これらは、母語を共有しない NNS との交流と、NS との交流における

表3 引用2~7を含むインタビューのやり取りのSCAT分析で生成されたストーリーラインと理論記述

引用	ストーリーライン	理論記述
2	CS1の「日本語NSが会話を主導し、学習者はそれに従うべきだ」という考えについて、CS2に「意見要求」をしたところ、CS2は、[突発的な意見]であると前置きした上、[自身の能力不信]についてはCS1と共通する考えを述べた一方、日本語NSの[語彙バラエティーの豊富さ]、[語彙レベルの高さ]、[発話スピードの速さ]により、コミュニケーションの際に[理解深化の制限]が生じると語った。このような、日本語NSと学習者の間にある大きな[レベルのギャップ]が、[困難なコミュニケーション]に繋がっており、反対に[学習者同士]であれば、レベルは[似たり寄ったり]で、不安が低下すると述べた。	日本語について、[自身の能力不信]を持つ学習者が多い。/日本語NSの[語彙バラエティーの豊富さ]、[語彙レベルの高さ]、[発話スピードの速さ]により、コミュニケーションの際に[理解深化の制限]が存在する。/日本語NSと学習者の間にある大きな[レベルのギャップ]が、[困難なコミュニケーション]に繋がる。/ [学習者同士]では、レベルは[似たり寄ったり]で、不安が低下する。
3	聞き手が[母語を共有する日本語NNS]、[母語を共有しない日本語NNS]、[日本語NS]とのコミュニケーションの中で、最も[緊張]や[不安]の度合いが高いものを尋ねたところ、CS3は[日本語NS]との[コミュニケーション]であると回答した。その理由は、日本語NSの[発話スピードの速さ]や[複雑な敬語の使用]が原因となり、[理解深化の制限]が起こり、コミュニケーションから[置いてけぼり]になった経験に起因するものであった。また、自身の日本語の[誤用]によって[コミュニケーション]の[ずれ違い]が起こる[不安]に加えて、[日本語NS]は[礼儀作法]を重視するため、[日本文化における礼儀正しさの規範]から逸脱する言動を取ると、[礼儀知らずのイメージ]を持たれる可能性がある。	対話者が[日本語NS]の時、[母語を共有する日本語NNS]、[母語を共有しない日本語NNS]の時よりも、[緊張]や[不安]の度合いが高い。/ [日本語NS]の[発話スピードの速さ]や[複雑な敬語の使用]が原因で、[理解深化の制限]が起こり、会話から[置いてけぼり]になる。/ [日本語NS]との[コミュニケーション]では、自身の日本語の[誤用]によって[コミュニケーション]の[ずれ違い]が起こる[不安]がある。/ [日本語NS]は[礼儀作法]を重視するため、[日本文化における礼儀正しさの規範]から逸脱する言動を取ると、[礼儀知らずのイメージ]を持たれる可能性がある。
4	[母語を共有する日本語NNS]、[母語を共有しない日本語NNS]、[日本語NS]の、[対話者]が異なる[接触場面]の[コミュニケーション]において、[緊張の緩和]に差異があるかどうかを尋ねたところ、CH4は、[母語を共有しない日本語NNS]との[日本語交流]で最も[緊張の緩和]を感じると答え、次の理由を述べた。まず、[母語を共有しない日本語NNS]は、[学習プロセス]や[学習困難事項]が[共通]していることから、[傾聴]や[話し合い]を通じ、[相互理解]を[志向]する。その[方略]として、使用する日本語の[難解さ]や[複雑さ]を[回避]し、[明確さ]を優先させる。そして、[NNS]として、使用言語を目標言語として共有しているため、[文法]や[発音]に[規範の逸脱]が生じた際も、[寛容]に受け入れ、お互いに[リラックス]した雰囲気を作り出すことが可能である。言語の[形式]よりも会話の[内容の深化]を[志向]するため、[誤用への不安]は少ない。さらに、[母語を共有しない日本語NNS]は一定の[日本文化理解度]を持つものの、[日本人]ほど[文化的規範]に[敏感]ではないため、[情報伝達]の[志向]性がより強い。	最も[緊張の緩和]が見られる[接触場面]は、[母語を共有しない日本語NNS]との[日本語交流]である。/ [母語を共有しない日本語NNS]は、[学習プロセス]や[学習困難事項]が[共通]しているため、[相互理解]を[志向]した、[傾聴]や[話し合い]を行う。日本語の[難解さ]や[複雑さ]を[回避]し、[明確さ]を優先させる。/ [母語を共有しない日本語NNS]は、使用言語を目標言語として共有しているため、[文法]や[発音]に[規範の逸脱]が生じた際も、[寛容]に受け入れ、お互いに[リラックス]した雰囲気を作り出すことができる。言語の[形式]よりも会話の[内容の深化]を[志向]するため、[誤用への不安]が少ない。/ [母語を共有しない日本語NNS]は、[日本人]ほど[文化的規範]に[敏感]ではないため、[情報伝達]の[志向]性がより強い。
5	[母語を共有しない日本語NNS]と、[日本語NS]とのコミュニケーションの[相違点]を尋ねたところ、[日本語NS]との[コミュニケーション]は、[ストレス]を感じると述べた。[自身の日本語]に[規範からの逸脱]が生じた場合、[自身の意図と異なる理解]がなされることに、常に[不安]を感じると語った。対照的に[母語を共有しない日本語NNS]との[コミュニケーション]では、[明確性]を志向するため、より[シンプル]な[語彙や表現の選択]がなされ、自身の[ローカルエラー]・[ミスタイク]に対する[不安]が[軽減]し、[リラックス]して、[コミュニケーション]できると述べた。	[日本語NS]との[コミュニケーション]では、[自身の日本語]に[規範からの逸脱]が生じた場合、[自身の意図と異なる理解]がなされることに、常に[不安]があり、[ストレス]を感じる。/ [母語を共有しない日本語NNS]との[コミュニケーション]では、[明確性]を志向するため、より[シンプル]な[語彙や表現の選択]がなされ、自身の[ローカルエラー]・[ミスタイク]に対する[不安]が[軽減]し、[リラックス]して、[コミュニケーション]できる。
6	CH2とCH3は、母語を共有しない日本語NNSとの日本語交流では[学習モチベーション]が向上し、相互に[学び合う姿勢]を感じたというCH1の意見に[同意]した。CH3は、この要因について、[中国の大学日本語学科]で[コミュニケーションタスク]を行う際、[母語を共有する日本語NNS 同士の日本語交流]では[コミュニケーションエラー]が生じた際、[中国語使用]によって修正することが容易であるが、[母語を共有しない日本語NNS]との日本語交流では[日本語以外の共通言語の不在]により、日本語を用いて、自身の[発話意図]の[正確な伝達]を達成する必要があると語った。	[母語を共有する日本語NNS 同士の日本語交流]では[コミュニケーションエラー]が生じた際、[中国語使用]によって修正することが容易である。/ [母語を共有しない日本語NNS]との日本語交流では[日本語以外の共通言語の不在]により、日本語を用いて、自身の[発話意図]の[正確な伝達]を達成する必要がある。/ 母語を共有しない日本語NNSとの日本語交流では[学習モチベーション]が向上し、相互に[学び合う姿勢]を感じる。
7	聞き手が[母語を共有する日本語NNS 同士の日本語交流]と[母語を共有しない日本語NNS との日本語交流]の[相違点]について尋ねたところ、CH5は、[母語を共有する日本語NNS]の日本語の[文法や語彙]には様々な[誤用]や[表現の不自然さ]が含まれるが、これらの[問題点]の[見過ごし]が散見される。/ [日本語へのコードスイッチング]の際、[頭の切り替え]が[困難]であり、母語を共有する日本語NNS 同士では[理解可能]でも、[日本語]の[文法規則から逸脱した日本語の使用]となってしまうことが多く、また、「[使用]」などの[音読み熟語]を用いた[スル動詞]の多くは、意味的に[中国語との共通点]があり、[中国語発音と類似]するものが多いため、[中国語NS]は多用する傾向があるが、[日本語NS]の[話し言葉]においてこれらの言葉は[非一般的]で、「[使用]する」ではなく「[使う]」や「[用いる]」がより一般的であると述べた。	[母語を共有する日本語NNS]の日本語の[文法や語彙]には様々な[誤用]や[表現の不自然さ]が含まれるが、これらの[問題点]の[見過ごし]が散見される。/ [日本語へのコードスイッチング]の際、[頭の切り替え]が[困難]であり、母語を共有する日本語NNS 同士では[理解可能]でも、[日本語]の[文法規則から逸脱した日本語の使用]となってしまうことが多い。/ [音読み熟語]を用いた[スル動詞]の多くは、意味的に[中国語との共通点]があり、また[中国語発音と類似]するものが多いため、[中国語NS]は多用する傾向があるが、[日本語NS]の[話し言葉]においてこれらの言葉は[非一般的]である。

『不安』や『緊張の緩和』の程度の比較とは異なり、その他の文脈とは切り離された母語を共有するNNS 同士の交流の特殊性を示すものである。『中国語の使用』と『前提の共有』は、次の引用6と引用7のように、中国の大学日本語学科での学生同士のコミュニケーションな活動に関する語りの中で、問題点として言及されている。引用箇所を含むインタビューのやり取りを、SCATの手法で分析し、表3

に示す通りストーリーラインと理論記述を生成した。

引用6—CH3, 口頭インタビュー①

(交流②は「学習意欲が刺激される」「お互いに学び合う雰囲気がある」というCH1の発言に同意するかという質問に対して) 昔、私たちの授業でも、ロールプレイのような宿題がありました。ク

ラスメイトと自分が、話したいテーマを選択して、自分たちでいろいろな会話を作ります。でも、分からなくても、中国語で交流すればいいですから。でも今回は (CHI) さんが言った通り、国が違います、母語が違います。そのため、自分が話したいことをちゃんと伝えなければなりません。

引用 7—CH5, 書面インタビュー①

(普段の教室内での学習者同士の交流と、交流②の違いについて) 話すときに頭を日本語の仕様に交換するのは難しく、単語をうまく組み合わせることができず、理解はできるけど、完全に文法がない言葉になってしまうことが多いです。(略) 中国人同士の日本語会話は日本人には不自然に聞こえるかもしれませんが、これは中国語学習者自身には意識されにくい問題です。

母語を共有する NNS 同士の交流で見られる、『中国語の使用』や『前提の共有』は、学習者に『緊張の緩和』をもたらす情意フィルターを下げる要因となり得るが、比較対象として学習者が語った、母語を共有しない NNS との交流の文脈で、ある程度の緊張感を伴って実感される、日本語をツールとして用いて意思伝達を達成する意識や、日本語コミュニケーションを通じて相互的に学び合う意識とは結びつかず、むしろこのような意識を妨げる要因になっていると考えられる。また、次の引用 8 から、母語を共有する NNS 同士の交流は、あくまでもシミュレーションとして認識され、本番性を伴うコミュニケーションとしては認識されていないことが感じられる。このような認識が『学びの緊張感』の不足に繋がる可能性がある。

引用 8—CH1, 書面インタビュー①

(母語を共有する NNS 同士の交流について) 学習効果がある。(略) 日本語のネイティブスピーカーとのコミュニケーションをシミュレートし、リスニングとスピーキングのスキルを向上させることができます。

6. まとめ

調査を通し、NS との交流だけでなく、母語を共有しない NNS との交流においても、学習者は様々な不安に直面していることが分かった。自身の発話に起因する『アウトプットの不安』は、対話者を問わず共通していた一方、対話者の発話に起因する『インプットの不安』は、対話者によって性質の違いが見られ、NS との交流では、対話者の発話スピードや語彙の難解さに対して、母語を共有しない NNS との交流では、自らの持つ日本語の規範から逸脱する、対話者の日本語使用に対して、不安が強まることが分かった。『緊張の緩和』は、主に母語を共有しない NNS との交流の文脈で語られた。学習者としての経験や感覚を共有し、規範からの逸脱に寛容であることから、よりリラックスした雰囲気でのコミュニケーションが達成される傾向が見られた。母語を共有する NNS 同士の交流で見られる『中国語の使用』や『前提の共有』は、学習者を最もリラックスさせるが、交流自体が実際のコミュニケーションとは異なるものとして認識され、それが『学びの緊張感』の不足に繋がる恐れがある。

以上の考察から、次の教育的示唆をまとめた。まだ習熟度が低い学習者は、習熟度の高い学習者と比べ、理解可能な語彙・文法の制限や、聴解能力の不足により、対話者との能力的ギャップが大きい NS との交流で『インプットの不安』を強く感じ、反対に、習熟度の高い学習者は、習熟度が低い学習者と比べ、それまでの学習経験を通し、より強固に確立された日本語の規範から逸脱する、対話者の日本語使用により、母語を共有しない NNS との交流で『インプットの不安』を強く感じやすい。母語を共有しない NNS との交流は、比較的習熟度の低い学習者にとって、対話者の発話スピードや語彙の難しさに対する不安から解放され、よりリラックスした雰囲気、コミュニケーション活動を行うのに有益な状況設定であると考えられる。母語を共有する NNS 同士の交流は、さらに『緊張の緩和』が強まる反面、『学びの緊張感』が不足する可能性があるが、母語を共有しない NNS との交流は、同様の懸念がない点においてもメリットがあると言える。以上の特徴から、母語を共有しない NNS 同士の交流は、特に比較

的習熟度の低い初級～初中級の学習者へのコミュニケーション的な活動の有益な環境設定として考慮に値する。一方で習熟度の高い中級～上級の学習者にとっては、反対に不安が強くなることも考えられる。国外とのオンライン交流活動の計画・実施に当たっては、情意フィルターを下げながらも、学びに必要な緊張感とのバランスを取るため、学習者のレベルを十分に考慮し、対話者を設定することが望ましい。国外とのオンライン交流は、外国語教育だけでなく、様々な教育分野で取り入れられている。目的が何であれ、参加者の中の誰かが外国語で活動に参加している状況に変わりはなく、交流の際の彼らの不安を把握し、対策を講じることは、スムーズな交流活動を運営する上で重要である。例えば、NS との交流において NNS が強く感じる『アウトプットの不安』を和らげるためには、交流前の準備段階で、NS 側の発話スピードや難解語彙の使用についての気づきを促すことが改善策になり得る。

交流の実践が学習者へもたらす学習の効果については、継続的な活動を続け、交流前・交流中・交流後の変化を観察することによって、より詳細に解明することができるだろう。今回は『不安』というテーマに絞り、分析と考察を行ったが、各接触場面で異なる特徴が表れる、その他のテーマにも注目すべきである。今後も長期的且つ縦断的な調査を続け、引き続き、海外の日本語教育に母語が異なる日本語学習者同士のオンライン交流活動を取り入れることの可能性を探索したい。

注

- 1 インタビューガイドは、Flick (2009) を参考に作成した(質問の例:「交流①②③で、最も緊張したのはどれですか」、「(交流②について) CH1 さんが「学習意欲が刺激される」「お互いに学び合う雰囲気がある」と書面アンケートに書いていましたが、CH2 さんや CH3 さんも同じように感じましたか」)。
- 2 二重かぎ括弧でテーマ・カテゴリーの名称を示す。これらはテキストの内容分析により、先行研究・他の研究者の助言を参考に、筆者が独自

にネーミングしたものである。

文献

- 赤羽 優子 (2014). 日本語非母語話者の日本語接触場面における心理面の調節—アジア系留学生の相手言語接触場面と第三者言語接触場面を対象に— 計量国語学, 29, 131-153.
- 趙 海城 (2021). 中国における日本語教育の現状と課題 明星大学全学共通教育研究紀要, 3, 105-112.
- Denzin, N. K., & Lincoln, Y. S. (2000). *Handbook of Qualitative Research*. SAGE.
- (デンジン, ノーマン, K・リンカン, イヴォンナ, S 平山 満義 (監訳) 岡野 一郎・古賀 正義 (編訳) (2006) 質的研究ハンドブック 1 巻: 質的研究のパラダイムと展望 北大路書房)
- ファン, サウクエン (2011). 第三者言語接触場面と日本語教育の可能性 日本語教育, 150, 42-55. https://doi.org/10.20721/nihongokyoiku.150.0_42
- Flick, U. (2009). *An Introduction to Qualitative Research*. SAGE.
- (フリック, ウヴェ 小田 博志 (監訳) 山本 則子・春日 常・宮地 尚子 (訳) (2011) 新版 質的研究入門〈人間の科学〉のための方法論 春秋社)
- Horwitz, E. K., Horwitz, M. B., & Cope, J. (1986). Foreign language classroom anxiety. *The Modern Language Journal*, 70(2), 125-132.
- Kleinmann, H. H. (1977). Avoidance behavior in adult second-language acquisition, *Language Learning*, 27, 93-107.
- 倉八 順子 (2021). 学ぶ意欲を育むために 「日本語教師」という仕事—多文化と対話する「ことば」を育む— (pp.84-93) 明石書店
- Krashen, S. D. (1981). *Second Language Acquisition and Second Language Learning*. Pergamon Press.
- 目黒 秋子 (2007). インターネットを利用した日本語教育 Skype を利用した Language Exchange セッションの試み—初級日本語授業の一環として 藤原 雅憲・堀 恵子・西村 よしみ・才田

- いずみ・内山 潤 (編) 大学における日本語教育の構築と展開—大坪一夫教授古稀記念論文集 (pp.345-360) ひつじ書房
- 中井 陽子 (2012). 言語的・実質的アクティビティを活かした会話教育 中井 陽子 (著) シリーズ言語学と言語教育 第 25 巻 インターアクション能力を育てる日本語の会話教育 (pp.137-262) ひつじ書房
- 大谷 尚 (2019). 質的研究の考え方：研究方法論から SCAT による分析まで 名古屋大学出版会
- Richards, L., & Morse, J. M. (2007). *Readme First for a User's Guide to Qualitative Methods*. SAGE.
(リチャーズ, リン・モース, ジャニス, M 小林 奈美 (監訳) (2008) はじめて学ぶ質的研究 医歯薬出版)
- Russell, V. (2020), Language anxiety and the online learner. *Foreign Language Annals*, 53 (2), 338-352.
<https://doi.org/10.1111/flan.12461>
- サンデロウスキー, マーガレット (2013). 質的研究をめぐる 10 のキークエスション：サンデロウスキー論文に学ぶ 谷津 裕子・江藤 裕之 (訳) 医学書院
- Scovel, T. (1978). The effect of affect on foreign language learning: A review of the anxiety research. *Language Learning*, 28(1), 129-142.
- Spielmann, G., & Radnofsky, M. L. (2001). Learning language under tension: New directions from a qualitative study. *The Modern Language Journal*, 85 (2), 259-278.
<https://doi.org/10.1111/0026-7902.00108>